



〔上圖、「完成せる統一體としての人格」論、難解部分の、恆存原文による補足〕

*すでに危殆に瀕してゐる西歐近代自我（個人主義）に對して、「前近代」の精神性に留ま

つてゐる我々日本人はどうしたらいいか。それについて福田恆存はかく言ふ。

「西歐を先進國として、それに追いつかうといふ立場から、『アジアの前近代的な非人格性を否定し、西歐の近代精神たる個人主義を身につけろといふのではない。それこそ、私のいふ距離感の喪失にほかなりません。私はあくまで西歐の生きかたと私たちとの間の距離を認識しろといつてゐるのです。眼前にある西歐を、(中略)まず異質なものとしてとらへ、位置づけすること、さうすることによつて『日本および日本人』の獨立が可能になるでせう。それを日本人の個人主義の成立とみなす」(『日本および日本人』)と。

そして「日本人の個人主義」の型を以下の如き例への中で展開し、「完成せる統一體としての人格」論として提言するのである。

「一般の日本人は、自分の子供が戦場に駆り立てられ、殺されるのが嫌だからと言つて、戦争に反対し、軍隊に反撥し、徴兵制度を否定する。が、これは『母親』の感情である。その点は『父親』でも同じであらう、が、『父親』は論理の筋道を立てる。國家(場面)といふフィクションを成り立たせるためには、子供が戦場に駆り立てられるのも止むを得ないと考へ、そのための制度もまたフィクションとして認める。が、彼にも感情がある。自分の子供だけは徴兵されないように小細工するかも知れぬ。私はそれもまた可と考へる。『父親』の人格の中には國民としての假面(役・自己劇化)と親としての假面と二つがあり、一人でその二役を演じ分けてゐるだけの事である。そして、その假面の使ひ分けを一つの完成した統一體として為し得るものが人格なのである。『私たちはしつかりしてゐない』という自覺が、『私たち』をしつかりさせてくれる別次元のフィクションとしての國家や防衛を要請するのである、要するに人格も法も國家も、すべてはフィクションなのであり、迫持(せりもち)、控へ壁などの備へによつて、その崩壊を防ぎ、努めてその維持を工夫しなければならぬものなのである」(P 703 全6『覺書』)(「テキスト十圖」：参照)

「問題は、すべてはフィクションであり、それを協力して造上げるのに一役買つてゐる國民の一人、公務員の一人、家族の一人といふ何役かを操る自分の中の集團的自己をひとつの堅固なフィクションとしての統一體たらしめる原動力は何かといふ事である。それは純粋な個人的自己であり、それがもし過去の歴史と大自然の生命力(時間的全體・空間的全體：小生注)に繋つてゐなければ、人格は崩壊する。現代の人間に最も欠けているものはその明確な意識ではないか」(全集六P 703～4『覺書』)と。

二役のみならず何役(國民の一人、公務員の一人、家族の一人)、を操る「自己劇化」が出来得る人格として、「完成せる統一體としての人格」論がそこに登場するのである。

何役かを操る「自己劇化」を別な表現では、各場面場面で關係的眞實を生かしていくのだ、との内容で言つてゐる。その究極が「完成せる統一體としての人格」なのだ。以下恆存の文を索引しながらその内容を記載する。括弧内は小生注である。(「テキスト十圖及び十一圖」：参照)

何役かを操る各場面でそこから発生する、關係の「眞實を生かすために一つのお面をかぶる(役を演ずる・自己劇化)」「演戲なしには人生は成り立たない。つまり假説なしには

成り立たない。「眞實といふのは、ひとつの関係の中にある。個々の實體よりはその関係の方が先に存在している。人生といふものは、関係（目上⇄目下・親⇄子・師⇄弟子・國⇄國民、等々）が眞實なんで、一生涯自分のおかれた関係の中でもつて動いてゐる。いろいろな関係を處理していき、それらの集積された関係がその人の生涯といふもの。それを私は演戲だといふ」「われわれがこしらへたものは、相對的であつて絶對ではないといふ原理をちやんと心得て、こいつを絶對化（假説の完璧化・築城の完璧化）しようといふ努力」（單行本『生き甲斐といふ事』中、對談「反近代につひて」P 195・199）

即ち要約すれば、各場面場面（國・企業・夫婦・親子・家庭・兄弟・師弟・友達・他者・等）から生ずる、関係と言ふ眞實（目上⇄目下・親⇄子・師⇄弟子・國⇄國民、等々）。その「眞實を生かすために一つのお面をかぶる（「誠實・至誠・愛・慈悲」等と言ふ名の宿命的役を演ずる：自己劇化）」。さうした行動の中に、しかもそれが典型として「テキスト十圖」の如く「假説の完璧化」が果たせられた場合に、「完成せる統一體としての人格」が現成するのである、と恆存は言ふ。

＊福田恆存における「全體・絶對」：（ ）内は吉野注〔拙發表文より〕

何故、恆存は「全體・絶對」を並列するのか。そしてその二つに内包されるものとは。

並列の重要参考文（ ）内は吉野注

「全體の、いや、もう神（絶對？）のといつてもいいでせうが・・・」（P283「絶對者の役割」）

恆存いはく。「私はクリスチャンじゃありませんけれども、なにか人間を越えるものの大きな力、それを歴史（時間的全體）となづけようが、自然（空間的全體）となづけようが、神となづけようが、さういふものを信じてをりますから・・・」（單：P 169『反近代について』對談「生き甲斐といふ事」）

「なにか人間を越えるものの大きな力」＝全體（人間：部分）を越えたるもの）・絶對（相對を絶したもの）と言ふ事では。

・・・恆存は「全體・絶對」を上記のやうに観て、「人間を越えるものの大きな力」の中に基督教の絶對神も、ロレンスの「コスモス」も、自然（空間的全體）も、歴史（時間的全體）も、或は仏教の「空」も、神道の「八百萬の神々」も、さうしたものをすべて含めて捉へてゐたのでは。

精神（人間が内部に持つ全體の觀念）⇒「全體の觀念」の客體化⇒万人共通の「人格神・絶對神」（キリスト教）

・・・とは「全體」の概念の内に「神・絶對」は内包される、と言ふことでは。

（重要参考文「全體の、いや、もう神のといつてもいいでせうが・・・」P 283「絶對者の役割」）

キリスト教の絶對神とは、人間が内部に持つ全體（精神）の客體化（万人共通としての）と言ふことか。